

小林秀雄著『本居宣長』:二十五章主題《『やまと魂・やまと心』(物:場 C')と、『姿(文辭の麗しさ)は似せがたく、意(詞の巧み)は似せ易し』との「關係論」的纏め》

①『やまと魂・やまと心』(物:場 C')②『文辭(修辞)』(物:場 C')③意(物:場 C')④『才(さえ:技藝、智識)』(物:場 C')⇒からの關係:①といふ『②の麗しさ(D1の至大化)』を「⑤:味識する經驗(D1の至大化)」とは、④に對抗する。(故に)①といふ②の傳へる③を理解(語釋:D1の至小化)するよりも、」⇒「⑥姿:⑦沈黙」(⑤的概念F)⇒E:先づ①といふ②が直に示して(Eの至大化)ある、その⑥(しき嶋の歌)を感ずる事(Eの至大化)。とはつまり、⑦に堪へる事を學ぶ知慧(Eの至大化)[即ち『皇大御國(F:すめらおほみくに)を黙して信ずる』智慧(Eの至大化)]の事であり、これ【⑦に堪へる事を學ぶ知慧[即ち①を働く(Eの至大化)心ばへ(智慧)】】さへしつかり摑めば、『言のよさ』(③即ち『ものの理非を、かしこいひまは』す)に『たじろぐ』(参照P235:D1の至小化)心配はない。⑧はそれを①が堅固(かた)まり(参照P235:D1の至大化)さへすれば、と言ふ(⑥⑦への距離獲得:Eの至大化)⇒⑧宣長(△枠):①②への適應正常。

①歌(物:場 C')②言葉(物:場 C')⇒からの關係:「③:例へば、ある①が麗しい(D1の至大化)とは、」⇒「④:姿」(③的概念F)⇒E:①の④が麗しいと感ずる(Eの至大化)事ではないか。そこでは、麗しい(轉義D1の至大化)とはつきり感知(Eの至大化)出来る④(F)を、②が作り上げて(合體Eの至大化)ある。それなら、②は實體ではないが、單なる符牒とも言へまい。②が作り上げる(合體Eの至大化)④(F)とは、肉眼に見える④(實體)ではないが、⑤には、(②によつて)まざまざと映する(Eの至大化)像(即ち、映する:合體Eの至大化=麗しい:轉義D1の至大化)には違ひない」(④への距離獲得:Eの至大化)⇒⑤心⑥小林曰く(△枠):①②への適應正常。

(物:場 C')…

①『やまと魂・やまと心』(物:場 C')②『文辭(修辞)』(物:場 C')③意(物:場 C')④『才(さえ:技藝、智識)』(物:場 C')

~~~~~

①歌(物:場 C')②言葉(物:場 C')

からの關係(D1の至大化)

①といふ『②の麗しさ(D1の至大化)』を「⑤:味識する經驗(D1の至大化)」とは、④に對抗する。(故に)①といふ②の傳へる③を理解(語釋:D1の至小化)するよりも、」

「③:例へば、ある①が麗しい(D1の至大化)とは、」

F(言葉・概念)…

「⑥姿:⑦沈黙」(⑤的概念F)

~~~~~

「④:姿」(③的概念F)

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]…「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。

*「先づ①といふ②が直に示して(Eの至大化)ある、その⑥(しき嶋の歌)を感ずる事(Eの至大化)。とはつまり、⑦に堪へる事を學ぶ知慧(Eの至大化)[即ち『皇大御國(F:すめらおほみくに)を黙して信ずる』智慧(Eの至大化)]の事であり、これ【⑦に堪へる事を學ぶ知慧[即ち①を働く(Eの至大化)心ばへ(智慧)】】さへしつかり摑めば、『言のよさ』(③即ち『ものの理非を、かしこいひまは』す)に『たじろぐ』(参照P235:D1の至小化)心配はない。⑧はそれを①が堅固(かた)まり(参照P235:D1の至大化)さへすれば、と言ふ(⑥⑦への距離獲得:Eの至大化)」。

~~~~~

\*「①の④が麗しいと感ずる(Eの至大化)事ではないか。そこでは、麗しい(轉義D1の至大化)とはつきり感知(Eの至大化)出来る④(F)を、②が作り上げて(合體Eの至大化)ある。それなら、②は實體ではないが、單なる符牒とも言へまい。②が作り上げる(合體Eの至大化)④(F)とは、肉眼に見える④(實體)ではないが、⑤には、(②によつて)まざまざと映する(Eの至大化)像(即ち、映する:合體Eの至大化=麗しい:轉義D1の至大化)には違ひない」(④への距離獲得:Eの至大化)】。

(△枠)⑧宣長／⑤心⑥小林曰く(△枠)